

最近注目されている非薬物療法

リアリティ・オリエンテーションの 現状と課題

山根 寛

京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻

リアリティ・オリエンテーション (RO) は、主に見当識障害がある認知症高齢者を対象に行われる行動修正法と環境療法の原理を組み合わせた治療法である。臨床的には、対象者同士やスタッフとのコミュニケーションの深まり、スタッフの対象者に対する理解の深まりと関与度の増加、対応の質の向上などにより、援助関係が向上し日常生活における混乱が減少するといった効果が期待できる。

KEY WORDS

認知症, 見当識障害, 24 時間 RO, クラスルーム RO, 回想法

はじめに

リアリティ・オリエンテーション (reality orientation : RO) は、1950 年代に米国の Taulbee と Folsom によって創始された。行動修正法と環境療法の原理を組み合わせた治療法で、多くは見当識障害がある高齢者を対象に行われ、1960 年代頃から各国に広がった。わが国にも紹介されたが、関心を持って試みられるようになったのは 1980 年代になってからと思われる。創始者の Folsom らが効用を紹介している^{1, 2)}が、有効であるという意見もあれば疑問をもつ意

見もある^{3, 4)}。基本的な技法が比較的簡易にみえるため、安易な利用のされ方が広まっていることがその理由の一つとみられる。

本稿では、ROの基本的な方法、効用と限界、有効に利用するための留意事項などについて紹介する。

1. 基本的な方法

ROの基本的な方法としては、表1に示すような24時間ROとその補助的な役割を担うクラスルームROの2種類がある。

24時間ROは、日常的なケアにおいて、対象者個々の見当識障害の状態に応じて、天気、曜日、時間や場所、季節など日々の基本的な情報を自然な形で繰り返し伝える個別的なアプローチの方法である。一方、クラスルームROは、個々の見当識の状態に応じて3、4人から多くても7、8人の小グループに分け、いつもと同じ時間に同じ場所で、名前、今居る場所、その日の年月日、曜日、天候や今日の予定など、個人および現在の基本的事項に関して、決められたプロ

● 表1 RO 2技法の比較

項 目	24時間RO	クラスルームRO
対 象	長期記憶が明確で、部分的に短期記憶の障害がみられるが、言語機能には障害がみられない認知症患者	
対象数・形態	個別に1名ずつ	比較的同質な対象3、4名～多くても7、8名の小グループ
時間・頻度	毎日のケアの中で随時	同じ時間に1日1、2度、1回30分程度できれば毎日、少なくとも週3～4回
スタッフ	担当制が取られている場合は対象者の担当を中心に施設の全員	セッションの担当者
場 所	対象者が生活している場	決まった同じ部屋
備 品	・カレンダー ・時計 ・新聞、テレビ、ラジオ ・季節の植物や食べ物などに関するもの ・季節の行事に関するものなど	・ホワイトボード ・カレンダー ・時計 ・各参加者の名札 ・お茶など

グラムに沿って的確に情報を提供する方法をいう。カレンダーや時計、季節の花や食べ物などを用いる。

24時間ROにクラスルームROを併用する場合もある。

2. 効用と限界

ROの本来の目的は見当識障害の進行防止や改善である。しかし、認知症の初期段階にはある程度有効であるが、病状が中等度以上になると見当識障害の改善という訓練的な効果は明らかでない。実際には表2に示すように、障害の程度を問わず、見当識障害の確実な改善より、季節や日時など生活に関することを介してお互いに生まれるコミュニケーションが大切である。特に、スタッフの入所者に対する理解が深まり、日々のかかわりにおいても観察が細やかになる。また、低下した生活機能の介助というかかわりが、一人の高齢者に寄り添い、生活行為を手助けするという質的な変化がみられるようになることが重要な効果の一つにある。

3. より有効な利用に向けて

前述したような援助関係の効果を活かすには、ROの技法を学ぶこともさる

● 表2 RO 2技法の限界と効用

項 目	24時間RO	クラスルームRO
目 的	本来の目的は見当識障害の進行防止、改善	
限 界	中等度までであれば見当識障害の予防や改善にある程度の効果がみられるが、個人差が大きい	軽度の認知症に対しては見当識障害の予防や多少の改善効果がみられる
実際の効用	・ 双方の実質的なコミュニケーションが深まる ・ 援助の関係が向上 ・ 日常生活における混乱が減少	・ 対象者同士やスタッフと対象者間のコミュニケーションの深まり ・ スタッフの入所者に対する理解の深まりと変化 ・ スタッフの関与度が増え、対応の質が向上

ことながら、認知機能が低下する過程における本人の葛藤や周りが問題行動という本人なりの対処のあり方を理解し、生活援助におけるかかわりの持ち方、対人関係援助技法を学ぶことが大切である。

そして、認知機能の低下により活動性が低下している者にとって、多くの施設は環境が一律に整えられているため、時間や曜日、季節、場所などの情報が生活の中に少ない。また、家族の不在や環境の変化などもあり、混乱やストレスの要因になることが多いという環境を十分考慮し、より現実的で具体的な情報を提供することが必要である。

また、カレンダーや時計、ボードへの記入といった情報の提供も必要ではあるが、現実感のない復唱は現実検討能力の改善とは別物であるだけでなく、不毛でさえある。できるだけ五感や生活経験を活かし、回想の技法や作業療法のように実際に体験を通して、現実感を保ったり取り戻す総合的な関与の仕方を学ぶとよい。

文 献

- 1) Folsom JC: Elderly patients found responsive to program of Reality Orientation. *Psychiatric Progress* 1: 1-3, 1966
- 2) Taulbee L et al: Reality orientation for geriatric patients. *Hosp Community Psychiatry* 17: 23-25, 1966
- 3) Holden UP et al: Reality orientation therapy; a study investigating the value of this therapy in the rehabilitation of elderly people. *Age Ageing* 7(2): 83-90, 1978
- 4) Voelkel D: A study of reality orientation and resocialization groups with confused elderly. *J Gerontol Nurs* 4(3): 13-18, 1978

● Profile

山根 寛 (Hiroshi Yamane)

京都大学大学院医学研究科教授

1960年代後半より病や障害があっても町で暮らす運動「土の会」活動を行う。1982年、作業療法士の資格を取得し、精神系総合病院に勤務。1989年、地域生活支援をフィールドに、生活の自律と適応を支援。「こころのバリアフリー」「こころの車いす」を提唱し、市民学習会「拾円塾」を主宰。日本作業療法士協会副会長、認知症ライフパートナー検定試験委員長、他。